

1 研究主題

自分の考えを持ち、学び合う子どもの育成

～ ふきだしを活用した算数授業づくり ～

2 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

<教育目標>

「ふるさとに学び、心豊かにたくましく、夢に向かって未来を拓く田沢っ子の育成」

<めざす子ども像>

「進んで学習する子ども」

- ・学習習慣を身につけ、主体的に学習に取り組む。
- ・基礎的基本的な知識及び技能を身につける。
- ・相手の話をよく聞き、自分の考えもきちんと言える。

本校では、これまで基礎基本の充実を図り、意欲的に学習を進め、友だちと共に学びながら「進んで学習する子ども」の育成に力を入れてきた。

さらに今年度は、学校経営方針重点『小規模・少人数のよさを生かした、「考える力を育む魅力ある授業づくり』の④言語活動の充実」に焦点を当て、研究を進めていきたいと考える。問題解決の過程の中で、自分の考えを伝え、友だちからの多様な考えを取り入れる活動を進める中で、「自分で考える子ども」「考えを表現する子ども」の育成に力を入れていきたい。

(2) 昨年度の研究と子どもの実態から

全校生33人の完全複式小規模校である。学習には真面目に取り組む児童が多く、集中力もある。今までの校内研究でも、「少人数の良さを生かした授業づくり」に重点をおき、授業の工夫に取り組んできた。2年生以上は複式の学習形態にも慣れ、間接時に授業を進める学習リーダーも役割を理解し、場に応じた指示ができるようになってきている。また、算数的活動を重視した授業を多く仕組む中で、児童の活動が活発化し、知的好奇心を高めることができた。学び合いのパターンも複数化し、話型を使って考えを発表し、グループでの伝え合いもできるようになってきている。学び合いを通して、仲間と学ぶ喜びを味わう姿も増えている。

しかし、どの学年も個人差が大きく、自分の考えを持つ段階で活動が止まってしまったり、考えを持つことができても、伝え合いの場面では、相手に考えが伝わるように順序立てて、分かりやすく、説明することが困難な児童の姿もある。また、グループで考えを伝え合っても、ポイントがつかめず、考えがまとまらないケースもある。全体的に、学びの意識が受け身であり、既習内容を生かす力に弱さも見られる。

そこで、「自分の考えを表現し、友だちに伝える活動」が中心になりがちな授業に、「友達の表現から考えをよんで、いかず活動」を積極的に取り入れ、理解を深めていきたいと考える。そのためには、自分の考えや気づきを「ふきだし」にあらわすことによって、思考の過程を残し、自分の考えを表現することや、友だちの考えを理解する手がかりとしていきたい。

(3) 学習指導要領のねらいから

学習指導要領では、子どもたちに「生きる力」を培うために、言語活動の充実を掲げている。「知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われる」とし、学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力であるとしている。

算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。

算数科においても「筋道を立てて考え表現する」ために、言語に関する力を高めていくことが求められている。考える能力と表現する能力は互いに補完し合う関係であり、自分の考えを表現しながら、自分の考えの良い点や誤りなどに気付いたり、筋道を立てて考えることを通してより良い考えを作ったりすることができるといえる。授業の中では、様々な考えを出し合い、お互いに学び合っていくことができるようになる。

そこで本研究では、「自ら考え、学び合う児童」を育成するために、「ふきだし」を活用することで、言語活動を充実させ、「考えを表現し合う授業づくり」に取り組んでいくこととした。

3 重点と手立て

(1) 精一杯考えたい課題設定

- ①過去の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、学習の対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりして、児童にとって必要感のある課題にする。
- ②児童の興味関心を高めるために、五感に訴えられる学習対象の出会いにする。(具体物、実体験写真、教師の演示など)

(2) 交流を大切にしたい表現の場の工夫

- ①自分の考えを発表する際に、協同的な関わりを根底においた話し方・聞き方のルールを作る。
- ②自分の考えを「ふきだし」に書かせ、それをもとに友達に分かりやすく説明したり、説明を理解したりして、話し合いを活性化させる。
- ③学年に応じた話型や、身につけさせたい算数用語を掲示し、活用させる。

4 「ふきだし」を活用した授業づくり

(1) 「ふきだし」活用のねらい

- ①式や結果だけでなく、思考の過程を「ふきだし」で残すことにより、それを手がかりにして筋道を立てて説明できるようにする。また、説明に必要な「ふきだし」を接続詞や補足説明を加えながら友達に説明することで、根拠をもとに自分の言葉で伝えられるようになる。
- ②「ふきだし」は児童にとって身近なものであり、話し言葉で書くことができる。書くことが苦手な児童でも気軽に書くことができる。

- ③書くスペースが限られているので、端的に表現できる。
- ④全学年複式で取り組むため、間接指導の際の児童の思考が残り、教師が次の直接指導に活かすことができる。また、「ふきだし」の内容を読み取りながら、個への支援を行ったり、それに見合った発問や助言、称賛を行ったりすることができる。
- ⑤「ふきだし」が残ることで、振り返りの際に、自分のその時の状況を知る手がかりとなり、自己評価につながる。

(2) 「ふきだし」を活用するための準備

- ①「ふきだし」の活用は、児童にとって新しい活動になるため、「ふきだし」の説明書のようなものを作成し、「ふきだし」の良さやきまりについて児童に説明する。拡大版を掲示し、縮小版をノートにはり、いつでも参考にできるようにする。
- ②ノートに書くのは「ふきだしメモ」、板書で共有するためのものは「ふきだしカード」とする。「ふきだしカード」は画用紙にふきだしを書いたものをラミネートし、ペンでの書き直しや、簡単な移動ができるようにする。
- ③課題から「見通しのふきだし」、課題解決の過程で「説明のふきだし」が書けるようにしていく。
- ④他教科でも、速く、簡潔に、丁寧に書く訓練を積み重ねていく。
- ⑤適切な場面で、適切な算数用語を書けるようにしていく

(3) ふきだしを活用した学習活動

段階	学習活動
導入	
見通し	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対しての考えや気づきを「ふきだし」で表す。 ・各自の「ふきだし」を発表し、解決のための手立てとする。
自力解決	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しの手立てをもとに、課題の解決に取り組む。 ・解決の過程で考えたり気づいたりしたことを「ふきだし」で表す。
伝え合い	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決の際に書いた「ふきだし」をもとに自分の考えを説明する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの「ふきだし」をもとに、本時で学習したことを文章でまとめる。
定着の確認	

5 研究の方法

(1) 理論研究

新学習指導要領や文献、研修会の参加などにより、教材開発のあり方、基礎的学力の定着・習熟のあり方などの研究を行う。

(2) 実践研究

<年間>

- 毎時間の授業の充実、教材・教具の工夫
- 算数科における基礎学力の到達目標を設定し、1年生から6年生までを見通した取り組みを行う。

○学力充実期間を設け、基礎学力の定着を図る。

○児童の実態調査をし、変容を明らかにする。

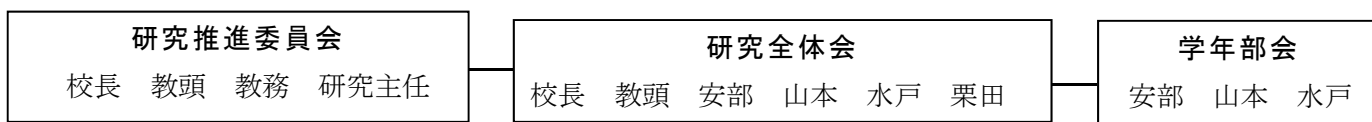
<研究授業>

○1人1授業の研究授業を行い、教材研究を深める。

○研究の重点をもとに研究授業を行い、成果や課題を明らかにする。

○「事前研、事後研便り」を発行し、研究授業の視点や成果・課題についての共通認識を図る。

(3) 研究組織



(4) 研究計画

月	日	研究会	研究内容
4	13	研究推進委員会	研究内容について
	24	校内研究全体会	研究の概要について提案 授業の進め方・複式授業の確認
5	18	校内研究全体会	研究の概要の共通理解 研究授業の進め方について 指導案の書き方
5	19	校内研究全体会	第1回授業研究会事前研 (3・4年)
5	30	校内研究全体会	第1回授業研究会 (3・4年)
7	28	校内研究全体会	研究の推進 (基礎・基本の定着) 1学期の学力向上具体策の評価・ 改善策のまとめと2学期に向けて
10	26	校内研究全体会	第2回授業研究会事前研 (1・2年) (5・6年)
11	17	校内研究全体会	第2回授業研究会 (1・2年) (5・6年)
12	24	校内研究全体会	研究の推進 (基礎・基本の定着) 2学期の学力向上具体策の評価・ 改善策のまとめ これまでの成果と課題のまとめ
1	18	校内研究全体会	研究のまとめ 研究紀要の書き方について
2	22	校内研究全体会	今年度の成果と課題 来年度の研究について
3	22	校内研究全体会	到達度の確認 NRT分析

6 研究の全体構造図

